

〔資料紹介〕

弘前市沢田の山神像

関根達人

はじめに

二〇二三年春、北東北三県（青森・岩手・秋田）から民間仏を集め、岩手県立美術館で開催された「みちのくといとしい仏たち」は、空前の好評を得て、その後、京都の龍谷ミュージアム、東京ステーションギャラリーと約一〇ヶ月にわたり各地を巡回し、北東北の民間仏の魅力を伝えた。展示会を企画した須藤弘敏氏（弘前大学名誉教授）は青森県史編纂事業に関連し、県内の寺院の悉皆調査を行うなかで、世に知られていない魅力的な民間仏を多数「発見」した（青森県二〇〇六・〇八・一〇）。須藤氏が意図した通り、出品された民間仏は、筆者を含め多くの観客に感動を与え、笑わせ泣かせた。

仏像造りの専門家ではない僧や大工などによって刻まれた民間仏は、必ずしも仏像本来の造形上の決まりごと（儀軌）にとらわれることなく、自分たちが信じる神や仏の姿を刻み信仰の対象とされてきた。民間仏は戦前から民芸の分野ではその素朴さが注目を集めてきたが、稚拙に見える造形のため美術史の世界では正当な評価を得てこなかった。

製作者や製作年を示す銘文が極めて少ないことも、これら民間仏がこ

れまで学問の俎上に載りにくかった要因の一つであろう。前述の展示会には一三四点が出品されたが、うち銘文等から製作年が特定できる作品は一〇点と、全体の一割に満たない。また製作者が判明するのは、参考資料として展示された青森県蓬田村正法院の円空作観音菩薩座像（青森県重宝）を除けば、会津久兵衛の矜羯羅童子立像・制吒迦童子立像（青森県板柳町蓮正院蔵）と、十和田市法蓮寺・七戸町青岩寺にある大工右衛門四郎の作品四〇点の計四二点にとどまる（須藤監修二〇二三）。前述の通り、青森県内では寺院所蔵仏の悉皆調査は行われたが、神社の調査はごく一部で、撰社に至ってはほぼ手つかずの状態に近い。筆者は以前、津軽各地からつがる市牛潟の高山稻荷神社に運び込まれた小神祠を調査した際、魅力的な民間仏を複数確認した（関根編二〇〇四）。インターネットオークションでは、時折出所不明の民間仏が出品され、高額で取引されている。過疎化が進むなか、民間仏の盗難・紛失が危惧される。庶民の切実な願いや宗教心が反映された民間仏は、美術史、民俗学、宗教・思想史、歴史学など多様な分野による学際的研究が期待される。本稿では、墨書から製作年や奉納者が特定できた弘前市沢田神明宮の山神像を紹介し、民間仏研究の一助としたい。

一 沢田神明宮について

本稿で紹介する山神像を祀る沢田神明宮は、弘前市大字沢田字園村一八―一番地に所在し、弘前市役所相馬支所から西南西に直線距離で約六キロメートル、鉢吞沢沿いに家屋が点在する沢田集落の北端、小倉山東麓にある高さ約一〇メートルの岩壁の崖面に位置する(図1a・1b)。

神明宮のある沢田村は正保二年(一六四五)の「津軽知行高之帳」に鼻和郡の新田として登場するが、貞享四年(一六八七)の検地帳では相馬村の支村として蘭村と表記されている。その後、享保十一年(一七二六)、相馬村より独立し、村名を沢田村に改めた。

寛政九年(一七九七)五月一六日、小倉(沢田)の神明宮を訪れた菅江真澄は、「洞窟のような岩屋がすごく高い。作沢川の岸、路傍にある茂った林の中の沢山の鳥居をくぐって急な、勾配伝いに渡した梯子を登ると、手すりが高く、お社は小さく、仰ぎ見る岩の梁のような所に鈴鰐口をかけています。参詣する人がこれを引くと、天にひびくように思われて、すがすがしい。今日は弘前から従者を沢山連れた人が参詣に来ますと言つて村の庄屋も出迎えていました。こうして岩屋のお堂に拍手して、「宮柱太しき立てて岩屋堂に動きなき世を守る神垣」と和歌を詠み、別の神のほころもところ所にあるので、お参りました」と「津介呂廻遠地」に記録した(口語訳は『相馬村誌』からの転載)。また翌年の三月一二日にも再び沢田神明宮に詣で、その晩は沢田村に泊まり、「月いづこ暗き汀に絶えずただ蛙の小夜ふかき聲」、「ほととぎす又一声

と思うまにつれなく空くる夏の夜の空」と二首の和歌を詠んでいる(「外浜奇勝」)。

沢田神明宮は、明治四年(一八七一)の「藩内大小神社調」では、天文三年(一五三四)勧請、旧号不動堂としており、明治九年の『新撰陸奥国誌』には天文三年六月一日に小倉山岩屋と呼ばれる岩山の中腹の洞窟に天当大日宮を勧請したとある。氏子の減少に伴い明治初期には藤沢村の藤沢神社(現在の野田神社)へ合祀されたが、昭和二年四月十七日、宗教法人令に基いて野田神社から御神体を迎え再興された。

旧暦正月一五日の晩に現在も行われている神明宮の「ろうそく祭」は、社殿のほら穴に蠟燭を灯し、家内安全と五穀の豊作を祈願するもので、雪の奥山の岩屋堂に灯りがゆらめくさまが観光客の人気を集めている。

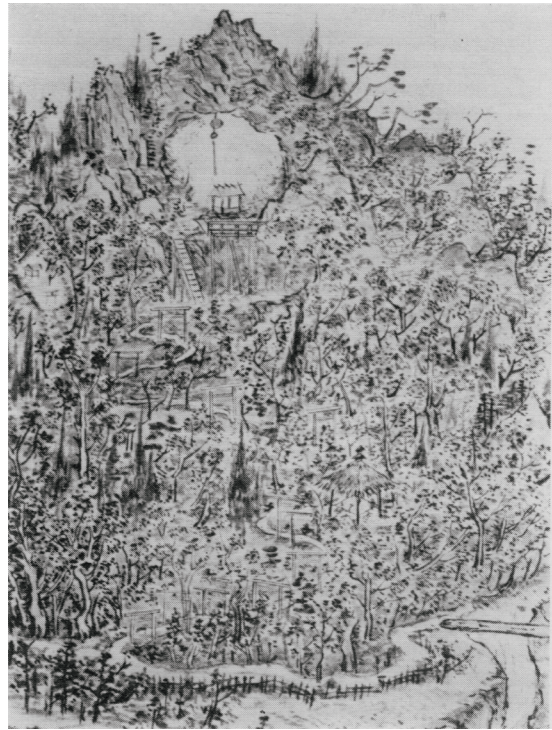
二 山神像について

山神像は、洞窟を覆う形で建つ神明宮に向かって左手の小神祠内に祀られている(図1c)。像本体は一本造りで、別木の台を伴う(図2)。大きさは、本体が高さ高二・七センチメートル、幅一四・五センチメートル、厚さ七センチメートルで、台は高さ九・三センチメートル、幅二五・八センチメートル、厚み八・八センチメートルである。

舟形の光背の前に両手で鉞を握りしめて立つ男性が陽刻されている。袖なしの上着から突き出た右腕は太く、いかにも山仕事に携わる人物にふさわしいが、左腕は理解に苦しむほど不自然な形であり、彫像に慣れない人物によって製作されたことを物語っている。光背・男性の衣服と



1a 沢田神明宮全景



1b 菅江真澄が描いた沢田神明宮（いわやの御社）
「津介呂廻遠地」より



1c 山神像を祀る社

図1 弘前市沢田神明宮と山神像を祀る社

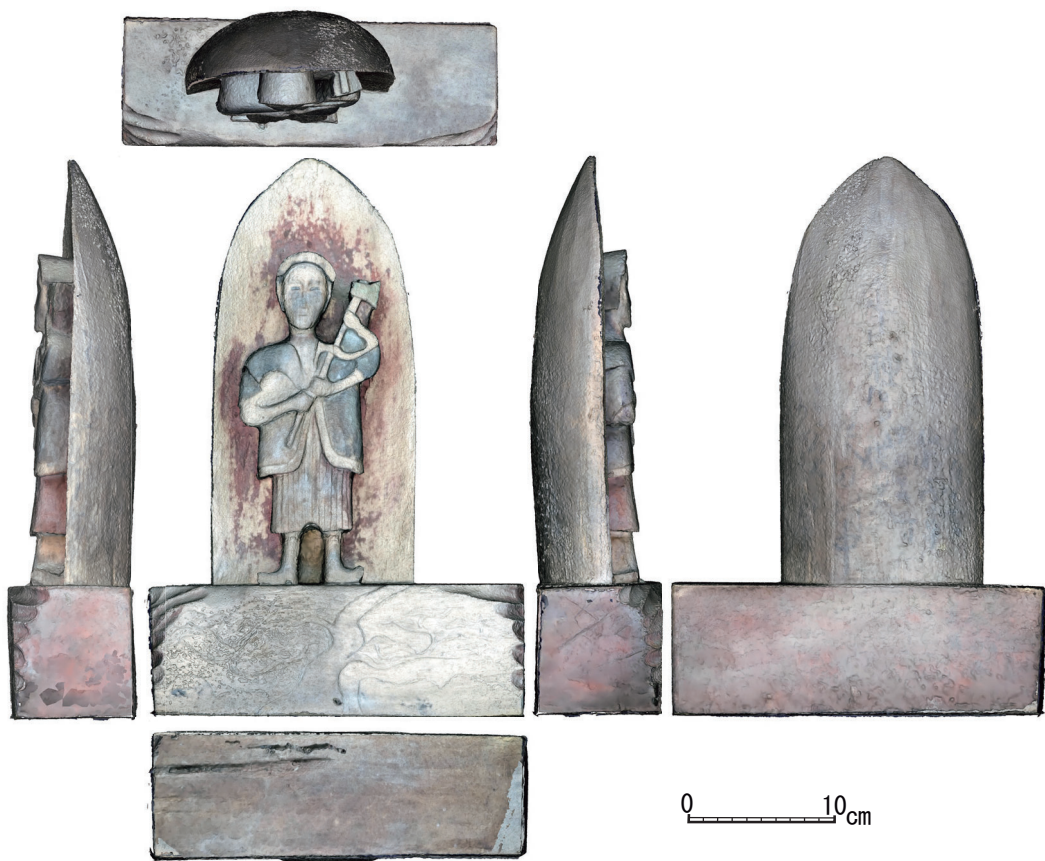


図 2 弘前市沢田神明宮の山神像

顔の一部には赤彩の痕が残る。

台は直方形の木材を利用しており、正面にのみ広く左右に枝を伸ばす松を陽刻し、前面の左右の角だけに連続的な彫り込みによる装飾が認められる。

本体の背面全体と台の背面右端に墨書が記されている(図3)。本体背面の墨書は、中央に「奉寄進山神宮」と大書し、その右側から下にかけて「天保九戌年王(閏)四月十七日 参詣 仕候 佐野茂郎 成田藤吾 相馬村中」と記し、左側には二首の和歌が添えられている。和歌の部分は墨書が消えており、赤外線カメラでも部分的にしか判読できないが、「古里の」で始まるものは佐野茂郎、「花も」で始まるものは成田藤吾が詠んだ歌と思われる。

墨書から山神像本体は、天保九年(一八三九)閏四月十七日に参詣した佐野茂郎・成田藤吾の二名と沢田村の人々によって、山神宮の祠に奉納されたことが分かる。佐野と成田の両名についてはどのような人物か不明だが、苗字を名乗っていることや、両名が詠んだ和歌の内容から判断して、沢田村出身で、しばらくぶりに帰省し、故郷の産土神に参拝した人物と推測される。⁽¹⁾ここで思い起こされるのが、菅江真澄が沢田神明宮を訪れた際に「津介呂廻遠地」に書き残した「けふは弘前よりとて、ずんざ(従者)あまたしたがひし人のまうでける」と「こと神のほくらもところどころにある」との記述である。真澄が訪れた当時、小倉山岩屋と呼ばれ大日を祀っていた沢田神明宮の境内には、他にも様々な小神祠が点在し、時折、弘前からも参拝に訪れる人がいたのである。小神祠の一つが山神宮であり、佐野や成田もまた弘前から参拝に訪れた人物で

あつた可能性が高い。

一方、台木には「嘉永六年癸丑年五月六日 今由久 参詣」とある。台は嘉永六年(一八五三)五月六日に参詣した今由久によって奉納されたと分かる。今由久についてもどのような人物か不明だが、前述の佐野や成田同様、沢田集落では確認できないが、津軽地方に多い苗字であることからみて、弘前の住人と思われる。

まとめにかえて

青森県内にみられる山の神は、木樵・炭焼・猟師(マタギ)など山に関係する人達が祀るものと、農民に信仰されているものの二種類があるとされ、前者は杣夫や炭焼の山小屋に神棚を作って祀るほか、杣夫や猟師が山に入る際に一二人になると、サンスケと呼ぶ木偶を作り行動を共にし、下山後は山の神の祠に納めたという⁽²⁾(青森県立郷土館一九七六)。サンスケは、こけしのように丸木に簡単な加工を加え、墨で目鼻などを表現したものが多く、藁製のものも知られる。

「津介呂廻遠地」では沢田村について「竹箕、籠匣造り、田はた作りぬ」とある。また『新撰陸奥国誌』によれば、沢田村は薪炭を常産し、木材の皮で蓑を作るなどして売りさばっていた典型的な山村である。本稿で紹介した山神像は像容からして山仕事を生業とするこの地の人々の信仰を集めていたと考えられる。沢田神明宮から東北東に向かって直線で約九〇〇メートルに位置する岩屋不動尊よりやや大助集落寄りの山の斜面の岩陰(大助字竜の口一二三―一)にも山の神を祀った祠があり、



図3 弘前市沢田神明宮の山神像光背および台の背面墨書赤外線写真

昭和九年（一九三四）旧二月一二日に大助村中により奉納された、右手に鉞を持つ石像の山神像が祀られている。大助・沢田など作沢川流域の村々は耕地面積が少なく、岩木川上流の目屋地区同様、戦前は山仕事の比重が大きかった。本像は、同じ山の民によって祀られた山神であっても造形的には即席で作られる粗雑なサンスケとは全く異なり、彩色や墨書を施すなど、稚拙ではあるが作りは比較的丁寧である。材質は異なるが、造形や大きさの点で、岩手県八幡平市の神社に祀られている、右手にまさかり、左手に剣を持つ山神石像に類似する（図4）。



図4 岩手県八幡平市内の山神石像
(高さ23.7cm) 須藤弘敏氏撮影
『みちのくといしい仏たち』より転載

本像が興味深いのは、奉納者として沢田村の住人より前に苗字を名乗る城下町弘前の人とおぼしき名前が記されていることである。和歌の内容から、彼らは沢田村出身で、しばらくぶりに故郷に戻り、産土神に詣でた記念にこの山神像を奉納したと推測した。

本稿で紹介した山神像は一見、山の民によって信仰されたように見えるが、実は江戸後期、山村と城下町が人的に深く結びついたことで生み出されたと結論づけられよう。

【謝辞】調査に際し、沢田町会長の大澤幹雄氏と弘前市教育委員会の鳶川貴祥氏にお世話になった。また墨書の判読にあたり瀧本壽史氏からご教示を得た。末筆ではありますが、感謝申し上げます。

註

- (1) 鉢吞沢沿い位置する沢田集落の共同墓地にある墓標のなかに、佐野や成田、後述する今といった苗字を確認することはできなかった。
- (2) 一般に一二日は山の神が木の数を数えるとして、山に入ることが禁止されており、祭りの日に設定されていることが多い。

引用・参考文献

- 青森県二〇〇六『下北の仏像 下北地方寺院所蔵文化財調査報告書』青森県史叢書
- 青森県二〇〇八『南部の仏像 南部地方寺院所蔵文化財調査報告書』青森県史叢書
- 青森県二〇一一『津軽の仏像 津軽地方寺院所蔵文化財調査報告書』青森県史叢書
- 青森県立郷土館一九七六『青森県の民間信仰』青森県民俗資料図録三
- 青森県立郷土館一九九六『特別展 西・北津軽の仏たち』
- 内田武志・宮本常一編一九七二『菅江真澄全集』三、未来社
- 須藤弘敏監修二〇二三『みちのくといしい仏たち』NHKプロモーション
- 関根達人編二〇〇四『津軽車力 高山稲荷神社の民間信仰品』弘前大学人文学部文化財論ゼミナール
- 相馬村誌編集委員会一九八二『相馬村誌』

(せきね・たつひと 弘前大学人文社会科学部教授)